仮説実験授業研究会　夏の全国合宿研究会伊香保大会のまとめ

2016/09/16

「何をするにも仮説実験」ならば，「会をするにも仮説実験」といえます。伊香保大会は約２ヶ月前に終わりました。しかし，それは実験が終わっただけです。そこで，結果を見て自分の予想（仮説）が確かなものだったのか，違っていたのか，さらに核心に迫るためには，どんな実験（問題）を行えば良いのか，などをまとめておかなければなりません。「たのしかった」「みなさん満足していたようだ」だけでは，いけないのです。結果を踏まえ，後の人が肩に乗れるものを残しておかなければなりません。ですから，未だ大会は終わっていないと言えます。そこで，本日とりあえずのまとめを行います。詳しいことは，近々まとめられるであろう記録集にまとめられると思われますが，大きな流れ，今次年度に伝えておきたいことなどは，とりあえず，形にしておきます。

１　大会コンセプト　　やりたかったことは何か

「笑顔に会える。あの人と話せる。それが合宿研究会」

これが，要項の頭に載せられた言葉です。ボクらがやりたかったことの一つに〈合宿研究会〉の再考があったといえます。しかし，高齢化などにともなう合宿しないことの気安さに対応するため，直接天坊や他の宿への申し込みにも対応するというハイブリッド合宿を売りにしたと考えています。

その他，この大会の柱は何だったでしょうか。あるいは，無かった？

スタッフ間での具体的な価値観の共有はなかった。

　これは大切なことなのかも知れない。その後の食い違いの基にもなる。

２　誰が，運営するのか　　実行委員を組織する

誰（どんな仕事）がいれば，大会は開催できる？

公募をした。「手伝うよ」という声をかけて下さった人は，大勢(何人かは結局把握できず）いた。

しかし，実際に事前の運営に関わったのは，群馬県内の５～６名が中心

それをサポートする人たちが県内外で20名ほど

２月の事前打ち合わせを兼ねた現地での「たのしい運営組織を考える会」は，23名の参加。この人たちが実際の運営係の中心となった。

どんな人が，どんなことをした（しなかった）

　前日準備も含めた大会期間中は，沢山の方にお世話になった。

３　そして会場の設定

会場レイアウト，売り場，本部，宿泊

目指したのは，売り場と本部の一体化。
それぞれの研究の成果が大衆に受け入れられているのかよく分かるのは，売り場の賑わいではないのか，と予想した。だからこそ，売り場は一カ所に設置するとともに，何となくたむろできる雰囲気を作りたいという森下，川島の予想

昨年８月に視察をした時，１階ホールは全体会場とする。売り場はその前のスペースということにしました。設置を望んだ本部ラウンジは，全体会場の入り口とします。しかし，課題は，お店が全てそのスペースに入りきるか，ということ。入りきらない場合に廊下とも考えましたが，ホテル側としては一般の客もあり，エレベータースペースとも重なる，セキュリティの確保ができない。などの理由で遠慮して欲しいとのこと。２階のロビーも考えましたが，どうしても階段で分断されてしまう。
その後の検討の結果，森下さん案は１階ホールに売り場を全て入れるというもの。常識的には，ステージもありイス席で数百人入るホールが全体会場が当たり前です。それを全体会は２階の大広間に移し，夕食会場と兼ねて使うという案。ホテル側に確認したら，それも可能だと言うこと。しかし，畳席で高齢者には辛い。これも一部イス席を用意できると言うことでクリア。
選択肢としては，ア　売り場の一体化を優先して１階は売り場スペース
イ　全体会を優先し，１階で全体会
ウ　その他（なかなか浮かばなかった）
が考えられます。
結局，売り場文化と本部ラウンジというたむろする文化を作れば合宿研究会の良さが出るのではないかという予想のもと１階ホールに売り場というレイアウトにしました。結果は，この一体化への評価がとても多かったことから，森下，川島案が支持されたという結果と考えています。

４　誰を何人集めたかったのか
参加者　３４３名　　天坊宿泊　27泊205名28泊198名　直接天坊　43名　他　98名
保育　３名　サマースクール　15名

群馬に住むものは，東京まで２時間程度で出られるということから，へんぴな場所という認識はあまりありません。しかし，全国から人が集まると考えると，最寄りの空港は羽田なのです。最寄り空港から３時間近くかかる。これは全国的には不便なところといえます。だから，300～400人くらいと予想して採算レベルを300参加としました。いつでも，どこでも大会に来て下さる層と群馬だから，日程が合ったから，という人もいるだろう。そこからの上乗せをどうするか。「今年の大会は行ってみても良いかな」と思わせる何かが必要でしょう。これを早く打ち出せば打ち出すほど，浮動票が集まると思えるのですが。これを打ち出すのが遅かったようです。後から，話を聞けば，「それなら，行きたかったなあ」という人がいたか，いなかったか。

５　どんな内容にしたかったか
全体会，分科会設定（内容，場所），研究

「大会は，各研究のカタログ」という栗原の一言で現在の先端の研究が広く大衆に知らされて，興味をもった人が後ほど専門的な各研究会を主催，参加するお披露目の場としての役割もあるのではないかと考えた。
分科会を玄人集団にしない，逆に言うと素人を交えて研究をより進める。
冬の全体会的な広がりを分科会にも出したい。
ということで，「お楽しみ分科会」と「アンコール分科会」を設定。
宣伝不足で，おたのしみの趣旨が今ひとつ認知されなかったかも。

さて，分科会の中身や参加者にとって，どうであったのか。

６　お金の問題
総収入　411万1000円　？　およそ４１０万
支出（都丸さんから）

参加費設定は，本来「どんなことに，いくらかかるか」という予算があって，決まるもの。その前提となるのは，「何をしたいか」である。
ところが，大会要項(募集案内)は，遅くとも春のフェスティバルには配布したい。(実際はできなかった)さらにところが，この時点ではまだ「何をしたいか」が明らかでない部分も多数ある。
そこで，結果的には「例年どうなっている」という前例に従った。
大会が近づき，具体化するにつれて，やりたいことも具体化してきたが，その時は既に遅し。お金が無い。
実験的に分かったこと
　参加費決めで迷ったら，多めに集めよ
「お金が無かったからできなかった」は，特に主催者のストレスとなる。だからといって，後から徴収はできない。やりたいことをやった結果お金があまりそうなら，お土産，資料代等参加者に還元する方法はいくらでもある。参加者は，申込時には「高いな」と思っても，大会終了時に満足していればそんなことは忘れる。逆に申込時に「安いな」と思っても，期待した内容で無ければ，不満が残り参加費は割高に感じるのではないか。これは，今後実験してみなければわからないけど。初期から参加している人の話では，教員の初任給と大会参加費の比率で言えば，今なら数万円でもいい。群馬県の初任給は約20万円。ボクの初任給はたぶん10万円をちょっと欠けるくらいだったような。30年前の大会参加費は，いくらだったのか分かれば今なら，どこまでか，わかるのだが。

７　参加者へのサービス　　サマースクール，保育など
赤パンツ劇団は，よかった。

平林さんの講座も含め，普段見られない，見たい講座を企画するのも良い。
計画よりも手が必要となる。多めに声をかけておくこと

8　その他の企画
本部ラウンジ
　これは，今回の目玉。評価も高い。

ガリ本ダービー
　当初実行委員会内で予想が分かれた。成立しないのではと言う予想も
　結果的にこれを機に作られたものや既存のものの見直しなどあり。
　今後も定例化して盛り上がるかどうかは，今後の実験結果

売り場景品福引き
　出店者からの宣伝機会
　運営方法をさらに工夫する余地も

資料の評価（ブラボー券）
　評価を評価するという発想を大切にしたい，という趣旨からはじめから全員に配布できると実験ができると思う。しかし，先立つものはお金。ここでも参加費の設定が重要となった。

配布物
『板倉研究室研究紀要』
　平野さんの仕事を正当に評価しないといけない。金銭的に誠意を示す。
　大会の予算からの支出は難しいので，これは，サークルの蓄え（基金は深淵さんがくださったもの）から出す。
袋
　長期で各集会で販売して

スタッフエプロン
　完売　　評価された

伊香保大会実行委員会賞
　感想からも評価された。できれば，花束だけでなく副賞もつけたい。

9　その他何でも

とりあえず，当日のメモをもとにまとめてみました。
総括と言えるものになっているとは，とうてい思えませんが，何らかの記録として大会をする人には役に立つ場合もあるかもしれません。